

中学校障害児学級卒業生の自立を支援する生涯学習の研究 —生涯学習教室の実施と考察(2)—

船津 守久 上田 邦夫 今崎 英明 若松 昭彦
奥野 正二 荒森 紀行 鬼木 智子 国元 育子

1 はじめに

附属東雲中学校障害児学級の卒業生は、「東雲青年学級」を組織し、その保護者や中学校教員らの支援を受けながら自主的な行事を企画し、月1回定期的に活動している。その学級生の中から学習的行事として「勉強会」を開いてほしいという声が上がリ、一昨年9月より「東雲生涯学習教室」を開設した。

「東雲生涯学習教室」は毎週火曜日午後6時30分から7時30分までの1時間、附属東雲中学校を会場として行うもので、対象は附属東雲中学校3組(障害児学級)の卒業生で組織する「東雲青年学級」のメンバーである。ただし、現在では継続して出席している青年学級生の知り合いの参加も認めており、現在2名が参加している。知的に障害をもち、知識・技能の習得により長い時間を必要とする彼らにこそ、社会に出た後の学習の場を保障する必要があるのではないかとこの考えのもと、「東雲生涯学習教室」を実施し、その効果を検証する。

2 経過

第1回目の平成15年9月9日には、9名の学級生が集まり、生涯学習教室がスタートした。教室で扱う学習内容は国語(主に漢字)と数学(全般)とした。当初主に漢字学習のプリントを支援者が用意していたが、11回目以降はD社発行の小学校向け学習ドリル(国語・算数)を全員に求めさせ、全員小学校1年生のレベルから学習を開始した。その後学習の進捗や個々の実力に応じてより高い学年のドリルに進んでいき、あるいは自分で探し、選んで購入した問題集などを使用するようになった。平成18年1月現在では小学校1年生の内容を学習している者から、すでに小学校6年生の内容の学習を行っている者もいる。

3 結果

1) 意識(出席率から)

表1 出席率

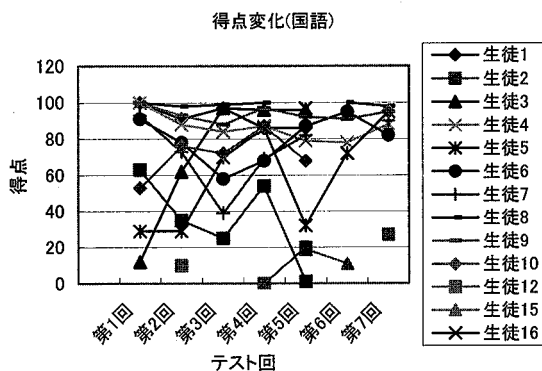
No.	出席日数	基準日数	出席率
s1	4	36	11.1
s2	6	36	16.7
s3	6	36	16.7
s4	28	36	77.8
s5	30	36	83.3
s6	33	36	91.7
s7	36	36	100.0
s8	12	36	33.3
s9	34	36	94.4
s10	32	36	88.9
s12	35	36	97.2
s15	10	23	43.5
s16	1	20	5.0
合計	267	439	60.8

平成16年度の第22回(平成17年1月18日)から平成17年度の第30回(平成17年12月20日)までを対象として、各参加者の出席率(出席日数÷出席基準日数)を求めた(表1)。中途からの参加者については、初参加回以降が基準日数である。

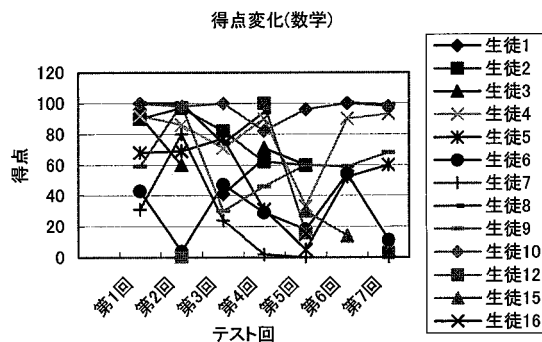
2) 学習の効果

3ヶ月ごとに行う実力テストの得点を元にして学習の効果を見る。ただし、テストは毎回それまでの各学習者の学習進度によって3~4種類の範囲を設定し、出題しており、ある範囲の問題を解答するメンバーは毎回変わるので、単純な比較で結論づけることはできないが、各個人の得点がどのように変化しているかを明らかにする。

図1は第1回目から第7回目までの個人別の得点変化を教科ごとに示したものである。対象は期間中一度以上教室に参加した者である。したがって全員が全て



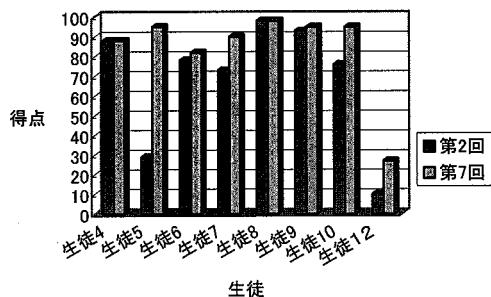
得点変化(国語)



得点変化(数学)

図1 教科別個人得点変化(1~7回)

第2回・7回得点比較(国語)



第2回・7回得点比較(数学)

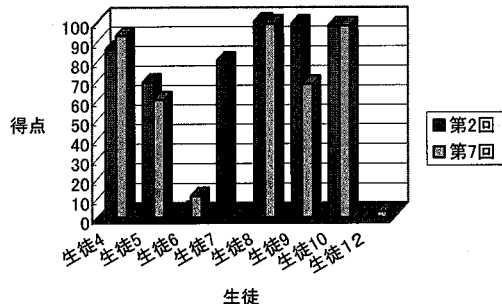


図2 第2回・7回得点比較

のテストを受けていない。

また、生徒番号の欠落している者は、過去一度以上参加していたが、本研究の対象期間には一度も出席しなかった者である。

このテスト結果では、個人の学習結果を論ずることができないので、第7回のテスト問題は第2回の問題と同一にして実施し、得点を比較することとした。その結果を表2及び図2に示す。

表2 第2回・7回得点比較

教科 生徒	国語		数学	
	第2回	第7回	第2回	第7回
生徒1	91	-	-	-
生徒2	35	-	97	-
生徒3	62	-	60	-
生徒4	88	88	86	93
生徒5	29	95	69	60
生徒6	78	82	4	11
生徒7	73	90	80	0
生徒8	98	98	100	99
生徒9	93	95	99	68
生徒10	76	95	98	98
生徒12	10	27	0	3
生徒15	-	-	-	-
生徒16	-	-	-	-

4 考察

1) 意識(出席率から)

対象期間中一度以上出席した者は生徒番号1~10, 12, 15, 16の13名であった。期間中の基準日数(教室が開催された日数)は36日で、生徒15は23, 生徒16は20である。

全体の出席率は基準日数439日に対して267日で60.8%であるが、個別に見ると出席率が80%以上の高率群と50%未満の低率群とに分かれる(表3)。高率群の出席率は90%に達する反面、低率群は21%にとどまっている。

低率群の生徒を個別にみると、やむを得ない事情で

表3 高低2群の出席率

高率群				低率群			
	出席日数	基準日数	出席率		出席日数	基準日数	出席率
生徒4	28	36	78%	生徒1	4	36	11%
生徒5	30	36	83%	生徒2	6	36	17%
生徒6	33	36	92%	生徒3	6	36	17%
生徒7	36	36	100%	生徒8	12	36	33%
生徒9	34	36	94%	生徒15	10	23	43%
生徒10	32	36	89%	生徒16	1	20	5%
生徒12	35	36	97%	平均	6.5	31.2	21%
平均	32.6	36	90%				

出席できなかった者(生徒1, 8), 学級生の知り合いで、まだなじみの薄い者(生徒15, 16), 職場の都合などで以前から欠席の多かった者(生徒2, 3)とそれぞれの事情がある。なお、生徒8については復帰後の出席率を別途算出すると、基準日数13に対して出席12で92.3%となる。また、高率群に入っている生徒12は前回の集計では基準日数15に対して出席7で46.7%であった。

これらの結果を見る限り、生徒の参加への意識は概ね良好であるといえる。しかし、前回の調査で明らかになった低出席率の要因(学力的に一人で学習を進めることが難しい, 他のメンバーと親しい関係に乏しい)があった者は生徒12を除いて今回の対象期間の出席はなかった。現在の形態をとる限り、一定以上の学力を有し、または親しい関係の友人が参加していることが継続していける条件となっている。

2) 学習の効果

7回の実力テストのうち、4回以上テストを受けた者を対象にその変化を検討する。

得点変化からは、二つの教科の結果を変化の傾向からいくつかのグループに分けることができる。国語では上昇, 安定, 不安定の3グループ(図3), 数学では安定, 不安定, 下降の3グループ(図4)である。

国語は前回の調査と同様の3グループであるが、数学については「下降」というグループが出現した。これらの結果を基に個人の傾向を明らかにし、その対策に言及する。

(1) 変化傾向から

前回の調査時との比較を表4に示す。生徒の欄の上段が前回調査時の傾向, 下段が今回の傾向を示す。記号は矢印の向きで↓上昇, →安定, ↓下降を, ×で不安定を示す。また欄全体の×印は対象期間の受験回数

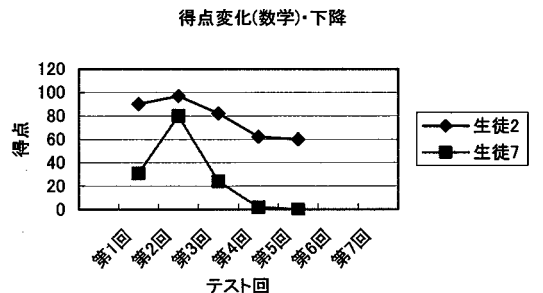
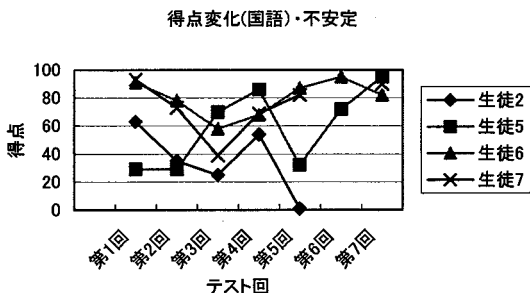
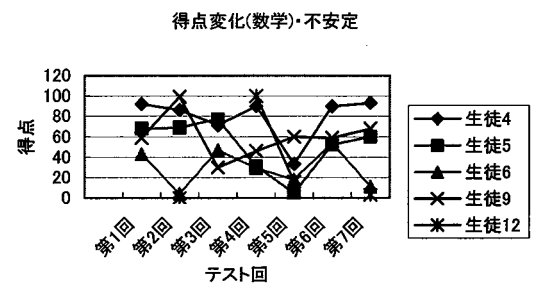
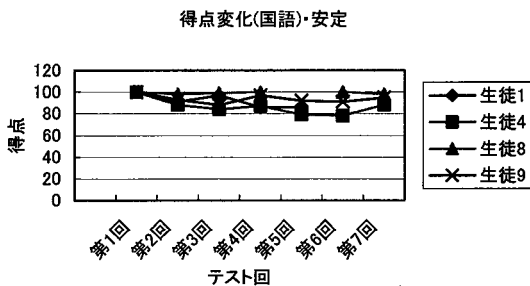
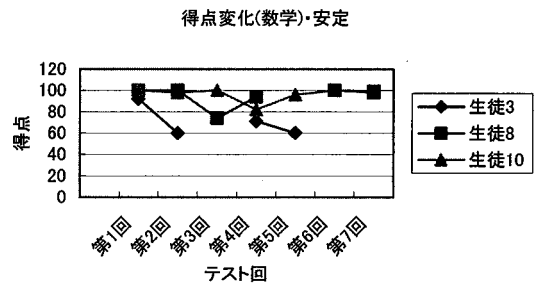
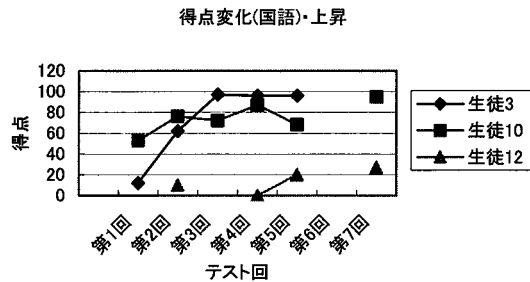


図3 国語得点変化

図4 数学得点変化

表4 変化傾向比較

	上段：前回		数学
	下段：今回		
	国語	数学	
生徒1	→	→	→
生徒2	→	→	→
生徒3	↑	→	→
生徒4	→	→	→
生徒5	↑	→	→
生徒6	→	→	→
生徒7	→	→	→
生徒8	→	→	→
生徒9	→	→	→
生徒10	↑	→	→
生徒12	↑	→	→

が基準に満たなかったことを表す。

国語ではほとんどの生徒が前回と今回で同様の変化傾向を示しているが、数学では異なる傾向を示す生徒も見られる。

生徒1は国語においてはたいへん安定して得点している。

生徒2は国語の不安定傾向が続いている。また前回数学では安定傾向であったのが今回下降傾向になっている。第4回目以降の点数が減少したためである。この生徒は普段から教室に来る時間が遅く、テストにも十分時間がかけられない場合が多い。6、7回目のテストを欠席しているので今後の様子に注目したい。

生徒3は国語では上昇傾向が続き、数学では安定して得点している。漢字の書き取りは得意だが、文法的内容を不得意としているので、そちらの学習に力点を置く必要がある。

生徒4も数学で前回安定傾向にあったのが今回は不安定傾向になっているが第5回目に大きく点数を落としたためでそれ以外の回では安定して得点している(第5回目の数学については後述する)。国語では安定して得点している。

生徒5は国語で傾向の違いが目立つ。第4回まで順調に得点を伸ばしていたが、第5回で大きく得点が下がり、その後は上がってきている。数学では不安定傾向が続いている。特に第5回目はほとんど得点にならなかった。

生徒6は国数とも不安定傾向が続いている。数学については第5回と第7回の得点が低かった。第7回については学習の進捗により出題範囲を広げたため結果的に不確実な分野で得点できていない。国語は第5回以降だけ見ると安定して高得点を得ており、この部分だけならばどちらかというと上昇傾向に近い。

生徒7は数学においてははっきり下降の傾向を示している。第2回以降7回まで得点が減少している。特に5回では(第6・7回は欠席)1問も解答できなかった。この第5回の数学の問題はすべて文章題で出題した。他の生徒の得点もこの回だけ低いのはこれに関係がある。計算力や数学的知識はあるのに文章を読んで状況

をイメージできないために正しい解答が導けないのである。生徒4、5、6、12がこれにあたる。国語については第3回目までの下降傾向から全体としては不安定傾向であるが、第4回以降は上昇傾向であり高得点を得ている。

生徒8は国数ともに安定して高い得点を得ている。より高度な内容の学習が可能であり、本人も望んでいるので学習内容のレベルをあげていく必要がある。

生徒9は国語では安定して高い得点を得ている。学習内容のレベルを上げていく必要がある。しかし数学では不安定傾向にあり、出題される内容によって得点が大きく変化する。不得意分野を明らかにし、重点的な学習を行う必要がある。

生徒10は国語では順調に得点を伸ばし、数学では安定して高い得点を得ている。特に漢字の習得については力を入れているのがよくわかる。より高度な内容の学習が可能である。

(2) 同一問題での比較

得点の変化傾向から各個人の学習の課題がいくらか明らかになった。前述のように、問題の難易度がテスト回ごとに変わっているため、得点の上下が本人の学習成果を正しく表しているとはいいいにくい。そこで第7回目のテスト問題は第2回目と同一にし、得点を比較してみた(表5)。

第2回・7回両方のテストを受けた者について両方の得点を教科ごとに比較している。(生徒7の数学は事情により対象から外した。)

国語では対象生徒すべてが同点以上の点数を得、得点差の平均は15.6点であった。しかし数学では点数を減らした者が3名おり、得点差の平均も-3.4点となった。このうち生徒5については数学で得点を減少させた反面国語の上昇が大きいので、テスト解答の時間配分が偏っていたのではないかと推察される。十分な時間があればどちらもより高い得点を得ることができたのではないだろうか。

生徒9についても時間不足が推察される。

表5 第2回・7回得点比較

	国語			数学		
	第2回	第7回	得点差	第2回	第7回	得点差
生徒4	88	88	0	86	93	7
生徒5	29	95	66	69	60	-9
生徒6	78	82	4	4	11	7
生徒7	73	90	17	
生徒8	98	98	0	100	99	-1
生徒9	93	95	2	99	68	-31
生徒10	76	95	19	98	98	0
生徒12	10	27	17	0	3	3
平均			15.6			-3.4

これらを考慮に入れると全般的に得点は向上しており、1年半の成果が表れているということができよう。

3) 態度(日々の学習の様子から)

前回の調査で生徒の学習に臨む態度は非常に良好であると結論づけた。客観的な分析は今回も行っていないが、日々の様子から検討してみる。

(1) 学習中の態度

学習中は各自の課題のドリルや問題集を持っているので、全員黙々とそれに取り組んでいる。

学習中の私語については特に注意するほどの乱れはないので、禁止する必要もなく、必要に応じて声をかける程度である。

時に携帯電話の着信音が鳴り響くことがある。学習中は電源を切るか、マナーモードにしておく約束であるので、その都度注意を受ける前に他のメンバーの冷たく厳しい視線を浴びることになる。

飲食については学習中は禁止している。しかし、仕事から直接参加して7時30分まで学習して帰るとなると、帰宅できるのは早くても8時頃となるので、個人レベルで学習開始前の軽食は黙認している。ただし、すでに学習をはじめている他のメンバーの邪魔にならないことが条件である。

(2) 集合時間

教室の開始は午後6時30分と決めているが、仕事の都合や個人的な理由で遅れることについては全く自由である。その都度電話で連絡してくる者もいれば、毎回のようにドタバタと遅れてやってくる者もいるが、自主的な学習の場であり、参加を義務づける性質のものではないので、遅刻も欠席も連絡は受けるが、それについてペナルティはない。「やる気がある人が、やる気のあるときに来なさい。」という場である。

回数を重ねるにつれてルーズになってきたかな、と感じたこともあったが、どの場合も各自にそれなりの理由があり、交通がさして便利でもない東雲中学校に、毎週仕事を終えた後に通ってこようとするだけでも立派なことであると思う。

(3) 生徒同士の関係

この教室は当初から自習が原則である。最近では諸事情によりその傾向がより顕著になっている。すなわち我々支援者が教室にいない時間が多くなった。すると、生徒同士での支援が行われることがある。生徒8や生徒10は他のメンバーから質問を受けることも多い。特に生徒8は数学にはすばらしいものをもっており席を離れて”指導”する場面もある。生徒7は昨年度途中から教室に顔を出し始めた生徒12を隣に座らせてよく面倒を見ている。学力的には他のメンバーと

なり開きがある生徒12が続けて参加できているのは生徒8の存在が大きいと思う。

このように生涯学習教室は職場も住居も離れているメンバーが週に1回同じ目的で集まり、互いに励まされ、親しみを感じながら目的(学習)に向けて各自真剣に取り組みつつひとときを過ごす場として機能しているようである。

5 結語～成果と課題

開始から2年4ヶ月を経た「東雲生涯学習教室」をいくつかのデータを元に検討した。実質会員数200人以上の東雲青年学級の中からこの教室に参加したのは16名で、現在教室で姿を見ることのできるのは8～10名である。この人数を多いと見るか少ないと見るかで教室の価値は変わってくるのかもしれないとは前回の調査でも述べたことであるが、そのほとんどが何とか欠席せず継続して参加していこうとしていることが最大の成果である。特にわれわれの都合でほとんど自習の状態が繰り返されても、黙々と学習を続ける彼らの姿にはこちらが学ばねばならないほどである。

今回の考察でいくつかの点が明らかになった。

まず出席率から、生涯学習教室に参加しようとするには自習を進めていけるだけの学力が、現実的には求められているということ、継続して参加しようとする動因には親しい仲間との共有できる場であるという意識が関係しているということ。次に実力テストの得点変化傾向から、各生徒個人の学習への多様な支援の必要性が必要になってきた、ということである。

個別の支援については当初から予想されていたことではあるが、小学校1年生レベルから同時に始めた学習が各自のペースの違いと得意分野の違いから多様化してきた。より高度な内容へと進むべきものと、壁に当たり、乗り越え方を考えねばならないもの、と二極化とも言える状況ができつつある。前回の調査で課題としたことの繰り返しにもなるが、やはりスタッフを充実する必要がある。開催の仕方について1から組み直す必要が迫っているのかもしれない。

前回の調査でも述べた言葉を再び使って結びたい。

既に学齢を過ぎて何年もたち、一社会人として生活している彼らであるが、このようなきちんとした学習の場と時間があり、ある程度の支援があればまだまだ知識を増やし、能力を高めていくことができるのである。そしてそれらを仕事に、また家庭生活に生かし、人間関係を豊かにしていって、ひいては自分自身の生活の質を向上させることにつながる。

是非そうあってほしいと願い、筆者らは「東雲生涯学習教室」は可能な限り継続していくつもりである。

参考文献

- 伊藤圭子, 黒瀬基郎, 船津守久, 若松昭彦, 荒森紀行, 国元育子, 奥野正二, 泉本聖子 中学校障害児学級卒業生の自立を支援する生涯学習の研究－料理教室の実施とその効用－ 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要第32号. 2004. pp. 389-394
- 船津守久, 黒瀬基郎, 今崎英明, 若松昭彦, 荒森紀行, 鬼木智子, 国元育子, 奥野正二 中学校障害児学級卒業生の自立を支援する生涯学習の研究－生涯学習教室の実施と考察－ 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要第33号. 2005. pp. 21-29.